

## 批評と紹介

季学原・章亦平主編

### 黄宗羲研究資料索引

山根 幸夫

吳光氏の序文によれば、本書は寧波師範学院黄宗羲研究室と余姚市郷賢研究資料中心のスタッフによって合作、編輯されたという。思想家として、また歴史家、文学家としての黄宗羲の評価が大きく論じられるようになったのは、清末の変法維新運動以来のことで、二〇世紀初めから一九八〇年初めまで出版、発表された研究は、著書一〇数冊、論文数百篇にのぼる。吳光氏はその代表的なものとして、梁啓超『中国近三百年学術史』、謝国楨『黄梨洲学譜』、侯外廬『中国早期啓蒙思想史』の他に、島田虔次、山井湧、小野和子らの著作を挙げている。

「八〇年代の改革開放期には、黄宗羲研究は高潮に達したが、これは疑いもなく我々浙江の学者が推動したものであ

った。一九八三年六月、私と沈善洪、李明友らの発起で浙江省中国哲学史研究会を設立し、浙江古籍出版社総編の方福仁、編審孫家遂の支持の下に、『黄宗羲全集』の整理、編輯、出版に着手した。全集は沈善洪が主編となり、省内外の十数人の学者が参加して校点を施した。全集は原著五百万字を収録し、一二冊に編し、浙江古籍出版社より陸續出版した。一九八四―八六年、浙江省社会科学学院と浙江省中国哲学史研究会、寧波師範学院、寧波大学、余姚市政协等の単位が先後して、首屆黄宗羲 浙東学派学術討論会、國際黄宗羲学術討論会等の学術会議を合作、開催した。其の後、浙江古籍出版社、台湾学生書局が先後して、吳光主編の論文集『黄宗羲論』、資料集『南雷雜著真迹』と吳光主撰『黄宗羲著作滙考』を出版し、浙江人民出版社は吳光『清初啓蒙思想家黄宗羲』、王鳳賢・丁国順『浙東学派研究』を出版、台湾允晨出版社は劉述先『黄宗羲心学的定位』を出版し、並びに吳光『黄宗羲年譜新編』を刊行しようとしている。

寧波師範学院の黄宗羲研究室は、一九八五年設立以来、莊嚴、季学原両氏の主持の下に、大量の資料整理や研究工作を進め、豊富な成果を収めた。又、彼等は黄宗羲学術討論会を主催し、『黄宗羲文献資料図片集』を刊行し、『黄宗羲』のビデオを作成、『黄宗羲研究專輯』（凡三輯）を編纂

し、『黄宗義詩文選』(校注本)、『明夷待訪録導読』等を出版し、二〇余篇の論文を発表した。又、季学原、章亦平両氏が主編の「黄宗義研究資料索引」が完成し、すこぶる詳細な充実したものとなった。(呉光) この資料索引と「黄宗義故郷考査報告」を併せたものが本書である。

季学原氏の前言によれば、前述の寧波師範学院黄宗義研究室と、一九九二年、黄宗義の故郷余姚市に作られた余姚市郷賢研究資料中心が合作、協力して、一九九三年七月「黄宗義研究資料索引」を完成したとしている。次に本書の目次を掲げておく。

#### 黄宗義研究資料索引(斯邁、張如安)

##### 一、散論索引

##### 二、專著索引

付属 黄宗義故郷考査報告

黄宗義故里考査報告(季学原)

竹橋黄氏述略(葉樹望)

梨洲先生故里考(徐仲力、諸煥燦)

黄宗義『続鈔堂』考(諸煥燦)

本書の内容は以上の如くであるが、全体で一七頁中、資料索引は五五頁で、分量から言えば、附録の方がやや多いわけである。「散論」は雑誌論文で、「專著」が単行本で

ある。数量的には勿論、散論の方がはるかに多い。散論は一九九二年までの論文を収め、論著は一九九三年までの著書を収めている。論文の最初は、一九〇三年の但焘「黄梨洲」(湖北学生界、一月)で、次は一九〇五年の実「黄梨洲像、付像贊」(国粹学報一)で、以下「国粹学報」の論文が七篇つづく。一九一六年には、干嘉次「明夷待訪録の思想」(東亞經濟研究六ノ七)、一九一九年には、小島祐馬「黄宗義の經濟思想」(經濟論叢七ノ一、二)と、日本の学者の論文が掲げられている。但し、小島論文は「黄宗義の政治・經濟思想」とするのが正確である。一九六五年の佐野公治「明夷待訪録たすソナま易姓革命思想」は、明夷待訪録におけるの間違いである。このような間違いがあるとしても、資料蒐集には非常に不便な浙江において、日本人の論文まで収録されたことは、敬服すべきであろう。然し、一九六四年の条に、小野和子「黄宗義の前半生」(東方学報三四)がなく、一九六一年におかれてるのは錯誤である。而も小野論文には「とくに『明夷待訪録』の成立過程として」という副題があるが、これを省かれたことも残念である。このような瑕瑾があるとしても、編者がよく日本人研究者の論文を収録されたことは多とせねばならぬ。

專著の方は、一九九三年に刊行されたものまでを収めている。最初に、清代における專著として、邵廷采『思復堂

文集・遺献黄文孝先生伝、全祖望『結琦亭集』卷一一『黄梨洲先生神道碑文』、『昭代名人尺牘』小伝卷『黄宗羲』を挙げてはいるが、これらを専著の部類に入れるか否かは、問題であろう。一九一五年の条に掲げられた曾毅『中国文学史』第五編「近代文学」第一章「前清文学之概観一・學術之發達」第三章「明季遺老」(上海泰東圖書局、一九一五初版)についても、同様のことが言える。このように「専著索引」には、専著の一部分を掲げたものが多く、実際の専著はそれほど多くはない。日本人の著述についても同様で、例えば山井湧『中国の名著・明夷待訪録』や『中国の思想家・黄宗羲』が、専著の部に入っている。日本の学者の専著としては、小野和子『黄宗羲』(人物往来社、一九六七)と山井湧『黄宗羲』(講談社、一九八三)の二点のみである。以上の如く、「資料索引」については、記載方法に問題がないわけではないが、黄宗羲に関する研究文献を博搜して、日本の文献にまで及び、一冊にまとめたことは、今後黄宗羲を研究する学徒にとって、大きな便宜になるのであろう。日本の中国思想史の研究者にも、大いに活用してほしいものである。

次には本書の附録である「黄宗羲故郷考查報告」について紹介する。冒頭の季学原「黄宗羲故郷考查報告」は、附録とは云い条、本書の重要な部分を占めており、「黄宗羲別号考釈」、「黄宗羲學術活動踪跡考」、「黄宗羲和江南藏書家」、「黄宗羲的夫人和岳父」、「孤墳三尺大于昆」、「黄宗羲和二老閣」、「七世孫黄炳皇和『留書種閣』の七節に分けて叙述する。先ず別号であるが、季氏は「酷烈な文字獄に對して、政略方面の考慮を持たざる能わず、その中で自然に『麥姓易名』を包括す」として、黄宗羲の別号がすこぶる多いことを説明している。彼の別号の中、「南雷」は彼本人も世人も最も多く用いたもの、「梨洲」も流伝のやや広い別号であるが、この別号に對する解釈は、訛誤がすこぶる多いとする。「麥湖漁澄洞主」は『四明山志・序』の中で、「雙瀑陀住持」「雙瀑堂住持」は『汰存録・題辭』に用いられている。「藍水漁人」は地名に基づくもの、「澗」は『海外勸哭記』中に見え、「古藏室史臣」は『弘光実録鈔』中に見える。「改齋」の号は新しく発見されたもので、『呂晚村詩集』中に見えるのとされたが、季氏はいろいろ考証の上、「改齋」は黄宗羲の別号と認めがたいとしている。次に、黄の「學術活動の踪跡」を論じるが、季氏は黄の著述と講学の両方面に分けて考察する。黄宗羲は清との武装闘争に敗れて、故郷に隠棲した一六六二年より、二年間で『明夷待訪録』を完成した。その後、『明儒學案』のような重要著作や大量の詩文が次々に著わされたが、その多くは化安山や黄竹浦で完成されたとする。化安山の中でも彼が著述に従事した場所は

四、五カ処あるが、重要なのは竜虎山堂と化安講寺だと云う。竜虎山堂（又は竜虎草堂）は、黄が帰郷後、最も長く住んだ場所で、一面避難の用をも兼ね、彼の読書著作の場所になった。次の化安寺は、草堂の前の溪水の岸上にあり、康熙六年、黄の母姚太夫人が地數十畝を捐して重建したもので、寺内には黄尊素の塑像があった。竜虎草堂が火災にあつて後、此処が黄の著述の基地になつたと云う。但し、化安寺も山津波にあつて、今は跡方もない由である。

黄竹浦で彼の著述の場所となつたのは、雪交亭と統鈔堂であつた。全祖望『雪交亭集序』によれば、素々雪交亭は張肯堂が舟山に築いたものであるが、順治八年九月、清兵の侵攻により破壊された。そこで、黄宗羲が姚江に、高宇泰が甬上にそれぞれ雪交亭を造つたのだと云う。統鈔堂は「一箇の蔵書屋、兼書房」であつた。統鈔堂は黄氏の住宅以外の新しい場所に營建された房屋で、住宅中の一処の旧房を移建して、統鈔堂の室名を名づけたものであろう、と季氏は推定している。なお、統鈔堂については、諸煥燦「黄宗羲『統鈔堂』考」でも論及されている。

次に、黄宗羲の學術活動の別の重要な一面として講学を挙げる。康熙六年、黄は老師劉宗周が創立し、二十余年中断していた証人書院を復活し、教育活動に従事した。黄の講学基地は寧波にあり、寧波西門外の白雲山莊、黄過堂、

南門の延慶寺、市内の広濟橋等が、その講学の場所であつたと述べている。

「黄宗羲和江南蔵書家」では、黄と関係のあつた江南の蔵書家を列挙している。先ず、天一閣の創始者范欽を挙げる。次に、鄭澐、その子鄭梁、その孫鄭性の三人を挙げ、鄭梁が父澐および老師黄宗羲を記念して、邸内に「二老閣」を建てたと云う。二老閣の蔵書は最少でも五万巻はあつた。孫鉦の蔵書は、一六四六年に焼け果てた。陳自舜の蔵書は、天一閣の蔵書に次ぐものであつた。黄澄量（五桂樓主人）は、聚書五万余巻に達し、その後人黄安瀾（光緒間）の蔵書は、六万巻に達した。祁承燦は邸内に澹生堂を建て、その蔵書を取めた。その子祁彪佳もまた著名な蔵書家であつた。澹生堂蔵書の最も価値のある部分は黄宗羲、呂留良の所有に帰し、残りの大半は仁和の趙昱兄弟の小山堂に移つた。鈕石溪（世学樓主人）以上は浙東の蔵書家である。

曹溶（秀水人）は好んで宋元の文集を取めたと云う。潘曾紘（烏程人）には、『後林潘氏書目』の著があつた。胡震亨（海塩人）はその蔵書万巻に達し、宋元文集も十余種有してゐた。呉之振（石門人）の蔵書の処は「黄葉村莊」と称した。以上は浙西の蔵書家であつた。

徐乾学（崑山人）の蔵書は、伝是樓に取められ、天下に甲たりと云われた。錢謙益（常熟人）は劉子威、錢功父、

楊五川、趙汝師四家の書を得、更に重資を惜しまず、古書を購入し、絳雲楼に収蔵した。黄居中（晋江人）は千頃堂藏書楼を建て、銳意蒐書につとめた。その仲子虞稷もこれを継ぎ、藏書は益々増加した。許元溥（長洲人）は好んで購書し、自ら「千卷生」と称した。李鶚翀（江陰人）はその藏書を得月楼に収め、『得月楼書目』を編した。焦竑（上元人）は藏書に両楼があり、『焦氏藏書目』二巻を編した。以上が江蘇の藏書家である。

「黄宗義の夫人和岳父」では、黄が同邑の広西按察使葉憲祖の娘宝林と結婚したことを述べるが、葉氏は宋代の詩人葉夢得の後で、憲祖は詩、詞、文、戯曲ともにすぐれ、殊に戯曲に著名な作品があった。妻宝林も詩文を能くした由である。黄の成長過程中で最も影響をうけてたのは、父尊素、老師劉宗周を除くと、岳父葉憲祖であったとしている。次の「孤墳三尺大于昆」は、一六八八年、黄宗義が八〇歳近くになって、自己のために生墳を宮建したことを述べている。「黄宗義和二老閣」の二老閣は、上述の江南藏書家の条で述べられていたように、黄の学生であり友人であった鄭梁とその子鄭性が、康熙六〇年に建てはじめ、雍正元年に竣工した藏書楼であった。鄭性は二老閣の建設者であっただけでなく、二老閣の事業の発揚者であり、黄氏の学に対する貢献は他方面にわたったと云う。又、鄭性の長子

大節は黄宗義の著作を校訂し、次子中節は家藏の珍籍を発刊し、玄孫助や喬遷も黄氏の学の発揚に貢献した。二老閣は黄宗義と浙東学派の学術活動の重要中心であった。季学原氏は鄭氏の黄氏の学に対する貢献と二老閣建設の意義を、次のように整理している。（一）敬虔に黄宗義を記念した。（二）黄宗義の藏書を整理して二老閣中に庋蔵し、後代の学者に沢潤した。（三）黄宗義の重要手稿を整理・保存し、その重要著作を校訂、刊行した。（四）黄宗義の遺物や彼の平生の事迹を搜集、輯録し、黄宗義研究のために重要な史料を提供した。（五）黄宗義の学術思想と治学方法を継承し、発揚した。全祖望は鄭性のこのような活動に対し、「先生（鄭性）の黄氏の学における、表彰、余力を遺さず」と述べたと云う（『鮚埼亭集』）。

「七世孫黄炳垕和留書種閣」では、学識渊博であった黄炳垕のことを述べている。炳垕は少年の頃から曆算の学を愛し、『測地志要』、『兩大交食捷算』、『五緯捷算』、『方儀象』、『曆学南針』等多くの著書をあらわした。彼は天象を觀察するため、余姚の旧廬に一小楼を建て「觀象楼」と名付けたと云う。この楼は三層で、一階は住室、二階は「留書種閣」とよばれたが、これは黄宗義の「留天下読書種」の一句から取った。留書種閣は黄宗義の記念堂であり、遺書の貯藏書であったが、一九六五年秋、台風のため倒壊し

た由である。

葉樹望「竹橋黃氏述略」は、余姚市梨洲文獻館に現蔵の『竹橋黃氏宗譜』（民国十五年重修）に基づいて、黃氏の家系について論じたものである。始祖黃万河は宋朝の南渡に當つて金華へ移り、その後余姚へ移つた。黃氏はその後七分支となつたが、黃宗羲は李家塔分支に属していた。黃宗羲の後裔は彼の思想と事業を繼承し、他方面の成就を達成した。又、黃宗羲が生前完成できなかった大著『宋元学案』は、黃百家と黃璋によつて続纂され、完成したことを述べている。

徐仲力・諸煥燦「梨洲先生故居考」は、黃宗羲の故居と出生地は、明偉郷の李家塔村ではなく、明偉郷東北隅の浦口村であつた。竹橋、黃家竹橋、竹浦、官埭浦、官船浦などは、すべて現今の「浦口村」の同地異名であつた。要するに、黃宗羲の故居は黃竹浦で、現在の浦口村であつたとしている。

最後の諸煥燦「黃宗羲『続鈔堂』考」では、上述の季学原論文が、黃の藏書屋兼書房として続鈔堂が建てられたことを述べているが、諸煥燦氏は本節で続鈔堂が果して存在したか否かを疑っている。全祖望の「梨洲先生神道碑文」には「続鈔堂を南雷に建つ」とあり、七世孫黃炳炆の『梨洲先生年譜』にも「続鈔堂を南雷に建つ」とある。然し、

諸氏は黃宗羲が果して続鈔堂を建設したか否かを、前人の記録、黃宗羲の經濟状況、当時の地理環境の諸方面から考察している。先ず、文獻上から見ても、黃宗羲が続鈔堂を建てたことは確認できず、その次に、当時の經濟的条件からみて、到底続鈔堂を建てる力はなかつたことを指摘する。更に、地理上からみても南雷に続鈔堂を建てることは不可能であつたとする。以上の如く見れば、黃宗羲が故居の外に別に一座の続鈔堂を建てて、書齋と為すことは不可能であつたと断じている。本節は僅か五頁の短い文章ではあるが、極めて興味深い、而も説得力のある一文である。

以上に紹介したように、本書は黃宗羲研究文獻目錄と附録の黃宗羲の故郷調査報告の二部分から構成されている。文獻目錄について言えば、上述した如く若干の問題もないわけではないが、中国・日本の学者の研究文獻をよく網羅しており、黃宗羲を研究する学者だけでなく、明末清初の思想を研究する者にとつても、すこぶる便利な、有益な文獻目錄である。

本書の編者たちは、文獻目錄に重点をおいたようであるが、私から見ると付録の諸篇もきわめて興味深いものである。殊に最初の季学原氏の論文は多方面にわたつて詳細に論じている。而も執筆者たちはいずれも余姚の学者であり、余姚の歴史や地理についても熟知している。本書の各論文

では、執筆者たちのそのような利点が十分に生かされている。地元の研究者でなければ、書けないような論文が多い。大思想家として黄宗羲を研究するためには、このような視点から考察することも必要なのである。それらの中でも、自明の事実と思われていた『統鈔堂』の存在を否定する諸煥燦氏の一文は、私にとって実に面白い一文であった。

本書は「浙東文化名人研究資料叢書」の一冊として刊行されたものである。今後、この研究資料叢書は次々に刊行されるのであろう。私は浙東の文化名人に関する研究資料が続々と発表されることを期待して止まない。文化名人と彼の故郷との関係が地元の研究者によって解明されることに、大きな意義を感じるものである。本書の存在を教示された、諸煥燦氏に心より感謝する次第である。

(一九九三年一〇月、浙江古籍出版社、A五判、一一七頁)

陳学文著

## 明清時期 杭嘉湖市鎮史研究

川勝 守

本書は前者『中国封建晚期的商品經濟』（湖南人民出版社、一九八九年）に続く陳学文氏の論文集である。同氏は山東大学歴史系の出身、五〇年代に広東佛山鎮研究により研究者となり、その後江南市鎮を中心とした明清江南社会經濟史の研究に従事した。現職は浙江社会科学院歴史研究所所長、江南市鎮の研究では、上海・復旦大学の樊樹志教授と双壁といわれ、国際的にも評価が高い。前者は明清時期の江蘇・浙江地方の經濟發展地域における商品生産と商品流通の様々な情況と諸問題を取り上げた。例えば、農業の商品生産と社会構造の関係、都市農村における家内副業ないし副次産品加工業の商品生産、都市における商業と手工業、市場網（ネット・ワーク）と市鎮群體、商品經濟が社会意識と民情風俗に与えた衝撃影響などについて検討を加えている。論述は独創的であり、素材や資料・史料も豊かで極めて珍しい地方史料には著者ならではのものも